

高烏砲台跡

高烏砲台は、呉の島々や山間部に築かれた 13 基の砲台のうちの一つである。「広島湾要塞」「呉要塞」とも呼ばれ、広島港と呉海軍港を敵船の接近から守るためのものであった。本土の高台にある

高烏砲台は、1901 年に完成した。本土と倉橋島を隔てる音戸の瀬戸海峡を見渡すことができる。

高烏砲台には 28 センチの榴弾砲が 6 連装されていたが、実際に戦闘に使われたことはなかった。

呉は 1886 年に海軍の主要な駐屯地に指定され、帝国陸軍は翌年にこれらの砲台の建設を計画

した。この計画は 1893 年に策定されたが、日清戦争（1894～1895）の影響で実施が遅れ、

実際に建設が始まったのは 1896 年のことであった。1920 年代後半からは海戦よりも空戦が主流

となり、高烏砲台は一度も使用されることなく、1926 年に軍部は高烏砲台を放棄した。戦前の昭

和（1926～1945）になると、帝国海軍はこの砲台を掌握し、近くの野原に高射砲を設置した。

しかし、この新設は第二次世界大戦（1939～1945）で全壊し、現在見られる遺跡だけが残っている。

第二次世界大戦後、占領下の連合国軍は残存する軍備を解体・破壊し、1961 年に音戸の瀬

戸公園として整備されるまで一帯は廃墟と化していた。1967 年には、高烏砲台にあった「高烏砲

台火薬庫」が入船山記念館に移された。同年、音戸の瀬戸公園には、音戸の瀬戸用水路を掘削

したという伝説を記念して、平清盛（1118～1181）の銅像が建立された。この伝説によると、清

盛は扇子を使って太陽が沈むのを遅らせ、一日で水路を完成させたと言われている。園内の展望台からは、瀬戸内海に浮かぶ小さな島々と、その間を行き交う船が一望できる。